

## 不登校児童生徒への対応研究部 研究報告（概要）

### 研究主題

市内小中学校の児童生徒不登校ゼロを目指した校内支援体制及び未然防止の取組について

### 概要説明

本研究部では、不登校問題に対して校内支援体制と未然防止の取組との2つを柱に研究を進める。今年度は、小中連携を視野に入れた未然防止の取組として、以下の2点について報告する。

- ① 児童生徒支援記録票「個票」の作成。
- ② 児童生徒の社会的スキルを育成するためのプログラム「ソーシャルスキル教育」（以下SSE）の授業を小中で実施、その効果の検証。

### 本研究の＜キーワード＞

- 小中連携
- 個票
- 月3日の欠席
- ストレス反応
- 人間関係づくり
- ソーシャルスキル教育（SSE）
- アセスメント

## I 研究主題

市内小中学校の児童生徒不登校ゼロを目指した校内支援体制及び未然防止の取組について

## II 主題設定の理由

### 1 不登校の定義

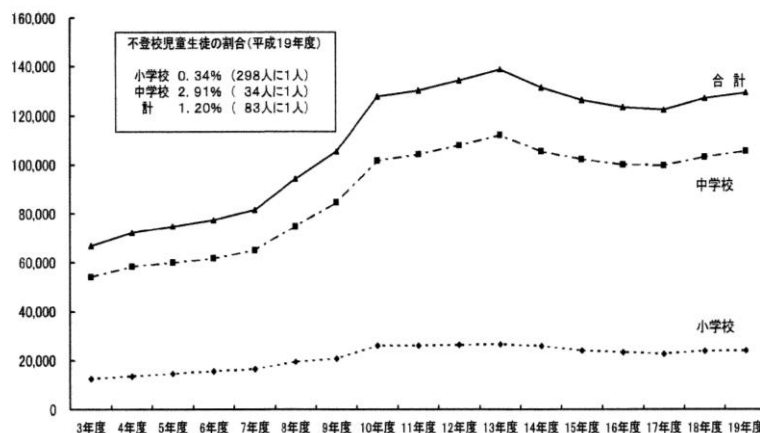
文部科学省では、「不登校児童生徒」とは「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義している。

### 2 不登校の現状と課題

「平成19年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(2008文部科学省)によると、全国の公・国・私立小中学校の不登校児童生徒数は、平成13年度で約14万人、19年度も約13万人にせまるなど非常に大きな学校教育上の課題となっている。

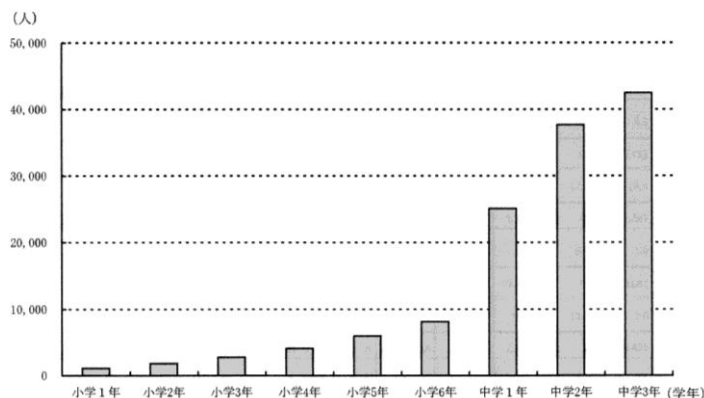
埼玉県では、平成17年度7142人、18年度7534人、19年度7458人となり、児童生徒総数の減少を考慮すると、状況が好転しているとは言いがたい。

不登校児童生徒数の推移



また、全国的な傾向として、  
 中学1年の不登校生徒数は小学6年と比較して約3倍になっている。その中学1年で不登校となっている生徒の半数は、小学校時に不登校相当の経験があったことなどがわかった。(国立教育政策研究所生徒指導研究センター, 2003)

学年別不登校児童生徒数のグラフ



その意味では、不登校は中学校で増加するというわけでは

なく、小学校で潜在的にあった課題が中学校になって不登校という形で顕在化すると考え、学区内の小学校と中学校が緊密に連携して取り組むことが重要となる。

一方で、不登校の要因や背景が一つに特定できないことも明らかになっている。不登校を画一的に捉えるのではなく、児童生徒の個別の事情に応じて丁寧に対応していく必要がある。そのためにも担任が一人で取り組むのではなく、学校としての体制の整備が不可欠となる。学校が何よりもなすべきことは未然防止の取組であるという点から本主題を設定した。

### III 研究の内容及び方法

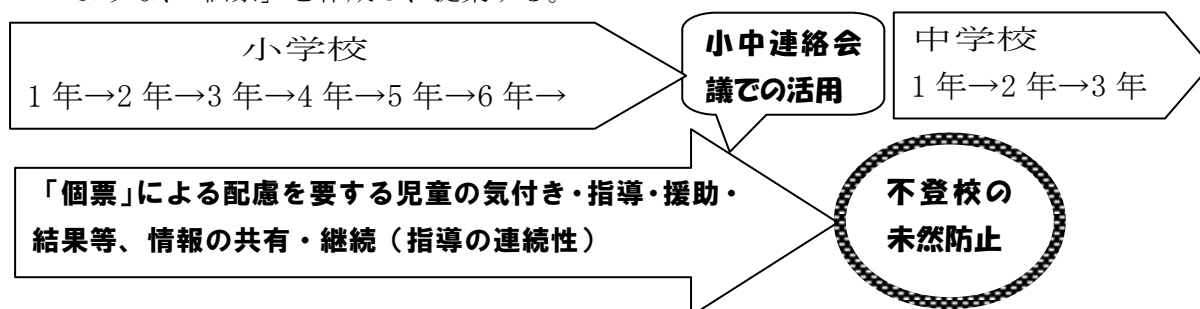
#### 1 児童支援記録票（個票）の作成

前段に述べたように、中学校の不登校の半数以上は、小学校からの「不登校相当」の状態が、そのまま中学校でも継続しているという。さらに4月の時点で数日休んだことが、そのまま不登校へとつながっていく傾向がある（国立教育政策研究所生徒指導研究センター, 2003）という点から、中学入学時での生徒の状況を把握することが、不登校の未然防止の大切な条件と考える。そこで役に立つのは、小学校からの確実な情報提供である。

多くの学校は、3月頃に「小中連絡会議」として情報交換を行っている。参加者は小学6年担当と中学3年担当の教師、生徒指導主任、教育相談主任等である。その際に情報として交換されるものは、クラス編成に利用されることが主な目的となる成績、運動技能、ピアノ等の特技、人間関係、配慮事項など、多くの項目である。

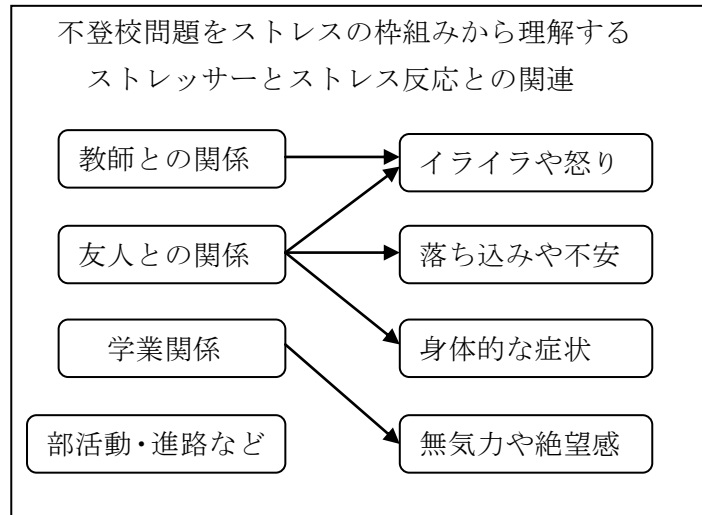
短時間で、多くの情報を交換する上、情報の作成は6年担任に任されることが多いので、5年以前の不登校の経験などの情報が、見落とされてしまうこともある。

そこで、小中の連絡会議において、不登校の未然防止のための有効な情報が交換できるような、「個票」を作成し、提案する。



## 2 SSEの授業研究

不登校という学校不適応の背景には児童生徒の何らかの「ストレス」の問題があるのではないかと指摘されている。(嶋田, 1998)。この心理的ストレスは、その原因となる「ストレスラー」とそれによって引き起こされる情動的、認知的、身体的変化である「ストレス反応」に大別されることが多い。児童生徒たちの学校不適応を変容、予防するためには、「ストレス反応」を軽減する必要がある。また、児童生徒の学校ストレスラーとストレス反応の関係を調べた研究では、友人関係のストレスラーが最もストレス反応に影響を及ぼすことが明らかにされている。(嶋田, 1998)したがって、友人関係のストレスラーに対するコーピング(対処)スキルを身につけさせることが、児童生徒のストレス反応を大きく軽減させると期待される。(嶋田ほか, 1996)



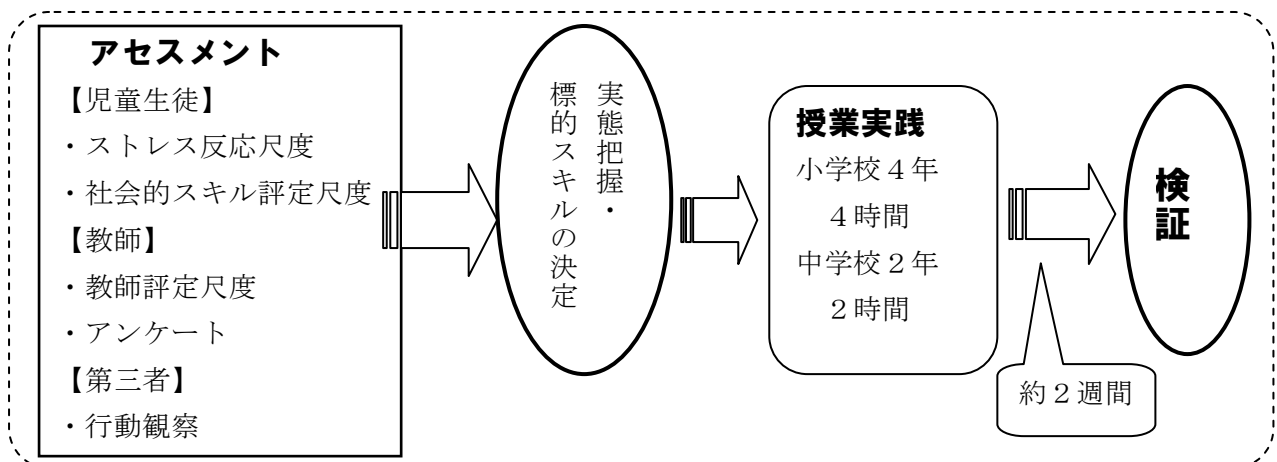
ソーシャルスキルとストレス反応の関係を調べた研究では、適切なソーシャルスキルを獲得し、不適切な行動を獲得していない児童生徒ほど、ストレス反応の表出が少ないことが明らかにされている。(嶋田, 1998) 不適切な行動のうち、特に引っ込み思案行動は、ストレス反応全般の表出との関係性が強い。よって引っ込み思案行動の改善、すなわち「主張性スキル」を獲得することでさまざまなストレス反応を軽減できると予想される。

また、アセスメント(実態把握)として実施した「社会的スキル尺度」においては、不登校傾向の児童生徒の主張性の項目が学級の平均に対して低い傾向であることもわかった。

そこで、本研究では、ストレス反応の軽減が期待できるソーシャルスキルを身につけることをねらい、小学校においては、主張性スキルを実践の標的スキルとして実施した。また、中学校においては、前述の友人関係のストレスラーに対するコーピング(対処)スキルとして問題解決スキルを実施した。

授業実践にあたり、早稲田大学人間科学学術院嶋田洋徳教授にご指導いただくとともに、早稲田大学大学院行動臨床心理学研究室の方々に協力していただいた。

今回の授業研究の流れ



### 3 研究の経過

平成 20 年 5 月 16 日 (金) 第 1 回研究協議 【会場】所沢市立教育センター  
平成 20 年 6 月 5 日 (木) 第 2 回研究協議 【会場】所沢市立教育センター  
平成 20 年 6 月 19 日 (木) 第 3 回研究協議 【会場】所沢市立教育センター  
平成 20 年 7 月 1 日 (火) 第 4 回研究協議 【会場】所沢市立教育センター  
平成 20 年 7 月 14 日 (月) 第 1 回研修会 【会場】早稲田大学三ヶ島キャンパス

指導者 早稲田大学人間科学学術院 嶋田洋徳教授

- ・不登校の予防について
- ・SSEの活用について

平成 20 年 7 月 22 日 (火) 第 5 回研究協議 【会場】所沢市立教育センター  
平成 20 年 7 月 31 日 (木) 第 6 回研究協議 【会場】所沢市立教育センター  
平成 20 年 8 月 19 日 (火) 第 7 回研究協議 【会場】所沢市立教育センター  
平成 20 年 8 月 28 日 (木) 第 2 回研修会 【会場】所沢市立教育センター

指導者 所沢市立柳瀬小学校 金澤広明校長

- ・研究の方向性について

平成 20 年 9 月 17 日 (水) 第 8 回研究協議 【会場】所沢市立教育センター  
平成 20 年 9 月 30 日 (火) 第 9 回研究協議 【会場】所沢市立教育センター  
平成 20 年 10 月 6 日 (月) 第 3 回研修会 【会場】早稲田大学三ヶ島キャンパス

指導者 早稲田大学人間科学学術院 嶋田洋徳教授

- ・SSEの指導方法について
- ・データの見方、活用について

平成 20 年 10 月 16 日 (木) 第 10 回研究協議 【会場】所沢市立教育センター  
平成 20 年 11 月 7 日 (金) 第 1 回授業研究 【会場】所沢市立明峰小学校

【内容】第 4 学年 「仲間に加わるスキル・聴くスキル」

授業者 担任と早稲田大学大学院生（行動臨床心理学研究室）との T T

平成 20 年 11 月 11 日 (火) 第 2 回授業研究 【会場】所沢市立明峰小学校

【内容】第 4 学年 「頼むスキル・断るスキル」

授業者 担任と早稲田大学大学院生（行動臨床心理学研究室）との T T

平成 20 年 11 月 13 日 (木) 第 11 回研究協議 【会場】所沢市立教育センター

平成 20 年 11 月 21 日 (金) 第 3 回授業研究 【会場】所沢市立狭山ヶ丘中学校

【内容】第 2 学年 「問題解決スキル①」

授業者 担任と早稲田大学大学院生（行動臨床心理学研究室）との T T

平成 20 年 11 月 28 日 (金) 第 4 回授業研究 【会場】所沢市立狭山ヶ丘中学校

【内容】第 2 学年 「問題解決スキル②」

授業者 担任と早稲田大学大学院生（行動臨床心理学研究室）との T T

平成 20 年 12 月 5 日 (金) 第 12 回研究協議 【会場】所沢市立教育センター

平成 20 年 12 月 15 日 (金) 第 13 回研究協議 【会場】所沢市立教育センター

平成 20 年 12 月 24 日 (水) 第 14 回研究協議 【会場】所沢市立教育センター

## IV 実践例

### 1 児童支援記録票（個票）の作成

#### (1) 個票の内容の決定

小中連携、不登校の未然防止を視野に、個票に入れるべき項目を検討した。

- ① 学習状況
- ② 性格・行動上の特徴（配慮すべき項目）
- ③ 出欠席の状況（保健室、相談室等他教室登校の状況も含めて）
- ④ 対人関係の特徴
- ⑤ 家族の状況（保護者の学校に対する信頼の状況も含めて）
- ⑥ 専門機関との連携状況

しかし、これらの情報をすべて盛り込んだものは、紙面が大きくなってしまい、読みにくいと考えた。

そこで、基本的な内容をA票にまとめ、個別の配慮事項については、カード形式にして付け加えるようにした。

#### 個別支援記録票 A・B



※児童の状況に応じて

- ・児童名
- ・家族構成・状況
- ・年間欠席数・遅刻・早退数
- ・配慮を要する項目（チェック式）
- ・担任歴
- ・指導・支援記録
- ・専門機関との連携記録

#### 【情報カード】

- ① **実態把握カード**（発達障害等の疑いがチェックできる。）
  - ② **不登校状況カード**（けが・入院以外で「月3日の欠席」・登校しぶりも記入。）
  - ③ **チーム支援計画カード**（校内体制で対応した場合の支援計画・結果を記入。）
- ※カードは、色分けすると使いやすい。

個別支援記録票Aの「支援」記録には、行った支援が有効であったかどうかを○、△、×などの記号を利用して、その後の支援に活かせるようにした。

情報カードには、チェック項目を多くして、担任が児童の状況に、改めて気付くことができるようにした。

情報カード②の不登校状況カードは、「けが・入院以外で各月3日の欠席や登校しぶりがあった場合に記入する。」こととした。これは、以下の3点から設定した。（2005 小林・小野）

- ① 「月3日の欠席」が10カ月（授業日）重なれば年間30日の欠席となる。
- ② 担任が意識しやすい目安となる。
- ③ 不登校開始時点の欠席日数調査で、「月3日の欠席」があってから問題が本格化していく場合が多い。

(2) 個票の実際

秘 配慮を要する児童 個別支援記録票 A 所沢市立〇〇小学校

ふりがな	ところさわ はなこ	性別	男 (女)	平成 17 年度 <b>入学</b> 転入					
氏名	所沢花子	平成 年 月 日生		年度	学年	担任名			
家族構成	H17 5月現在 母 (48) 兄 中1	家庭状況	H18 5月 離婚のため母子家庭 <small>保護者が学校への不信感が強いなど特記する必要がある場合はこの欄に記入</small>	17	1年	並木 太郎			
				18	2年				
				19	3年				
				20	4年				
					5年				
					6年				
児童の状況			1年	2年	3年	4年	5年	6年	※個に応じて ●B票(裏) ●実態把握カード ●不登校状況カード ※登校しぶり各月3日以上 ●チーム支援方針カード
学力面	学習困難		○	○	○				
言語									
対人関係	トラブルが多い 関わりを持ちたがらない	○		○					
集団行動についていけない									
情緒	落ち着きがない・集中できない 自己コントロールができない								
自閉的傾向・こだわり									
身体的障害・病気									
登校しぶり・不登校傾向・不登校		◎	◎	◎					
家庭的な問題									
反社会的行動									
その他			いじめ						
遅刻・早退数(延べ回数)		16回	20回	17回	回	回	回		
年間欠席日数		25日	19日	32日	日	日	日		
学年	学校での様子・問題点等	支援内容: 効果あった→○ ?→△ なかった→×					外部機関との連携等		
1年	登校しぶり(4月~5月) 不登校傾向(9月~10月)	母親と登校(○) 算数別室個別指導(○) 家庭訪問(△) ●子と同班になったこと・母親が登校を強く励ますことで登校に向く(○)					市教育センター(母親が直接連絡)担当F相談員		
2年	いじめ(A子・Bにもの隠しなどされる) 登校しぶり10~2月	箇条書き・項目程度で記入する。生徒指導個票を張り付けてもよい。詳しく記録する必要がある場合は、裏のB票に記入していく。							
3年	不登校傾向(4月~7月)	相談室登校(6月~)(○) 学習支援(○) チーム支援(○)							
4年									
5年									
6年									

年	組	児童名
---	---	-----

記入者名	支援（対応）日時・支援者・支援の内容	児童・保護者の様子
担任中央	4/17 欠席3日目 保護者に電話連絡	風邪のため欠席（母親）
	4/25 欠席累計6日 家庭訪問	朝になるとトイレかけこむ（母親）
教育相談主任（中）	5/28 欠席累計12日 ケース会議【担任・学年主任・教育相談主任・コーディネーター担当・相談員・少数担当（ ）・養護教諭】 以下の3点を確認 ※支援計画	
	①母親への支援（相談員・養護教諭）	相談員との面談で、父親への不満を話す。
	②本人との関係づくり（担任・少数担当）	
	③外部機関との連携（コーディネーター）	

事実を箇条書き・項目程度で記入する。

**秘** 不登校状況カード (けが・入院以外で毎月3日以上欠席者と登校しぶりの児童は記入する)

<b>年 組 児童名</b>	<b>担任名</b>
----------------	------------

**★出欠状況**

月	欠席数	遅刻数	早退数	主な欠席等理由	別室(保健室・相談室)登校数
4月					
5月					
6月					
7月					
9月					
10月					
11月					
12月					
1月					
2月					
3月					
合計					

**★不登校・登校しぶりのきっかけ(わかる範囲で記入)**

**★不登校・登校しぶりが継続している要因(考えられるものすべてにチェックする)**

- 特定の人間関係のもつれ だれか( )  
 対人関係がうまくいかない     集団行動になじめない     発達障害またはその疑い  
 学業不振 主な教科等     家庭の事情(保護者の状況等)

**★本人の性格・行動面での様子**

**★本人・保護者の登校に対する意識**

本人

保護者

**★本人が信頼し、心を開いている人的資源**

【学校内】( )内は名前

- 担任( )     養護教諭( )     相談員( )     担任外( )  
 友人(クラス内)( )     友人(クラス外)( )

【学校外】※クラブコーチなど知る範囲で記入

- 【家庭内】 父親     母親     兄弟姉妹( )     その他( )



## 2 小学校におけるSSEの授業実践 <第4学年>

### (1) 日程と実践したスキル

10月3日(金) アセスメント実施

「児童用社会的スキル評定尺度」教師評定版 資料1

「児童用社会的スキル尺度」資料2

「ストレス反応尺度」資料3

10月20日(月) 行動観察・スキル決定

11月7日(金) 5校時 SSE 仲間に加わるスキル

6校時 SSE 聴き方スキル

11月11日(火) 3校時 SSE 頼むスキル

4校時 SSE 断るスキル

11月21日(金) 事後測定・検証(10月3日に実施したアセスメントと同じ)

### (2) 実践例(11月11日(火)4校時 「SSE 断るスキル」)

<ねらい>


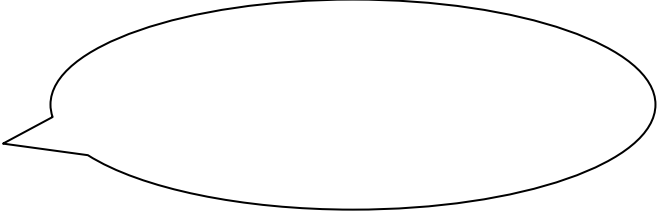
友達に意見を言うとき、自分の要求をただ通すだけでは、相手に嫌な思いをさせる可能性があること、自分が我慢するだけでは、自分自身にストレスがたまる可能性があることを理解し、お互いにいい気持ちになれる言い方のスキルを身につけることができるようにする。

<本時の指導>

活動内容	指導上の留意点
1 約束事の復習をする。	・「笑わない・ふざけない・はずかしがらない」の約束を黒板に貼り、確認する。
2 本時の目標を知る。	・本時は、「上手にことわろう」というスキルを身につけることを知らせる。
3 断り方の実演を見て、感想を発表する。	・今日は早く帰りたいと思っていたら、友達に「放課後一緒に遊ぼう。」と誘われた場面において ①攻撃的な言い方(ジャイアン) ②非主張的な言い方(のびたくん) ③主張的な言い方(しずかちゃん) を違いがわかるように演じ分ける。 ・それぞれの言い方のどんな所が、お互いにどのような気持ちになるのか考えられるようにする。
4 お互いにいい気持ちになるような断り方を考える。	・「劇の役割を決めていて、自分はほかの役がやりたいのに、主役に推薦された場面」を設定し、自分だったらどう断るか、実際の言葉でワークシートに記入させる。
5 ロールプレイを行い、適切な断り方を見つける。	・2人組のペアを作り、断られた後どんな気持ちになるかを意識させて、ロールプレイを行うようにする。 ・相手の反応からいろいろな断り方をペア同士で考えさせ、お互いに嫌な気持ちにならない断り方を一つ見つけられるようにする。
6 適切な断り方を発表する。	・お互いにいい気持ちになれる断り方ができたペアに発表させ、どこが良かったのか考えられるようにする。

<p>7 上手な断り方のポイントをまとめる。</p> <p>8 本時のまとめをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言い方は、一つに絞らず、それぞれの良さに気付けるようにする。</li> <li>・&lt;はっきり言う。理由を言う。お礼を言う。謝る。&gt;などのポイントが、確認できるようにする。</li> <li>・上手な断り方のポイントを確認し、お互いにいい気持ちになれる言い方ができるように意欲づけをする。</li> </ul>
--	--

<ワークシート>

11月11日(火)	組 番 名前
<b>上手にことわろう!</b>	
<p><b>ワーク1 どれがいい?</b></p> <p>ジャイアン、のびたくん、しずかちゃんの「ことわり方」を見て、感想を下に書いてみましょう。</p> <p>ジャイアンのことわり方</p> <div style="border: 1px solid black; height: 30px; margin-bottom: 10px;"></div> <p>のびたくんのことわり方</p> <div style="border: 1px solid black; height: 30px; margin-bottom: 10px;"></div> <p>しずかちゃんのことわり方</p> <div style="border: 1px solid black; height: 30px;"></div>	
<p><b>ワーク2 あなたならどうする?</b></p> <p>げきの役わりを決めています。あなたは、友達から主役にすいせんされましたが、ほかの役がやりたいので、そのことを伝えたいと思います。あなたなら、どう言いますか?ふき出しに書いてみましょう。</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center; margin-top: 20px;">  <div style="margin-left: 20px;">  </div> </div>	
<p><b>ワーク3 どこがよかったのかな?</b></p> <p>友達の発表のどこがよかったか、考えて書いてみましょう。</p> <div style="border: 1px solid black; height: 30px; margin-top: 10px;"></div>	

(3) 実践効果の検討

授業実践後、SSEの効果を見るために、授業前に行ったものと同じ尺度の測定を行った。授業前に主張性の低かった児童2名（AさんBさん）をターゲット児童とし、学級全体と2名の児童の効果を数値化して検証した。結果は以下のとおりである。

Aさん、Bさんともに主張性のポイントが上がっている。Aさんは、さらに、仲間強化や社会的働きかけのポイントも上がった。Aさんは、1学期は7日間欠席し、体調の不良を訴えることが多かったが、2学期は、1日も欠席していない。休み時間や放課後も毎日友達と外遊びをするなど、活発さが出てきた。Bさんは、規律性や社会的働きかけのポイントが上がり、休み時間や放課後は、大勢の友達と遊ぶようになった。

早稲田大学大学院行動臨床心理学研究室による分析結果からも、統計的に有意に社会的スキル得点が上がり、ストレス反応得点が下がったことが立証され、授業の効果があったと考えられる。

<児童用社会的スキル評定尺度>

下位因子の項目	Aさん		Bさん		学級の平均	
	前	後	前	後	前	後
①仲間強化 (1, 2, 4, 11, 12, 21, 26, 27, 28, 29)	30	35	19	19	25.675	27.075
②先生との関係(3, 5, 18, )	7	10	5	6	6.475	7.075
③葛藤解決(6, 10, 13, 23, )	11	11	6	6	8.575	8.5
④規律性(7, 9, 15, 16, 20, 25, )	19	22	9	13	15.625	16.3
⑤主張性(8, 14, 17, )	6	7	3	4	6.075	6.975
⑥社会的働きかけ(19, 22, 24)	8	11	7	8	7.75	8.625

<ストレス反応尺度>

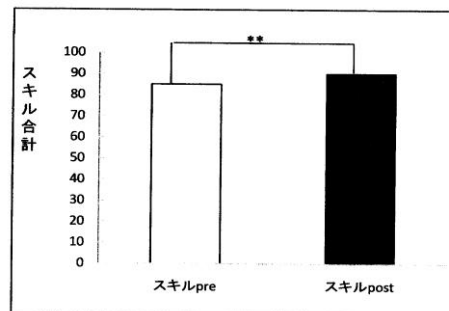
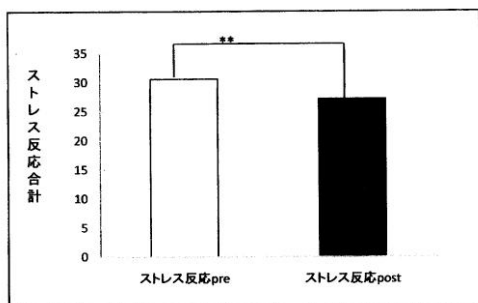
下位因子の項目	Aさん		Bさん		学級の平均	
	前	後	前	後	前	後
①身体的反応(10, 13, 15, 16, 19)	13	13	6	6	6.525	5.75
②抑うつ・不安感情(2, 6, 17, 20, 23)	7	7	11	7	5.675	5
③不機嫌・怒り感情(3, 8, 12, 14, 18)	7	6	9	9	6.2	5.85
④無気力(1, 4, 7, 21, 24)	8	7	9	8	6.8	5.85

\* 下位因子の項目の(番号)は、資料2と3の尺度の項目番号である。

<早稲田大学大学院行動臨床心理学研究室による 学級全体の結果と分析>

社会的スキル得点

ストレス反応得点



資料1 児童用社会的スキル評定尺度（教師評定版）

＜記入の仕方＞		
各児童について、その行動が	全く見られなかったら	⇒1
	少しみられたら	⇒2
	時々みられたら	⇒3
	良くみられたら	⇒4
	非常に良く見られたら	⇒5

		出席番号		
		性別		
		氏名		
1	仲間遊びに誘う。			
2	教師の手助けが必要なときに、教師が来てくれるまでの時間を有効に使う。			
3	けんかの場面でも感情を抑える。			
4	誰かがあるグループから不当な扱いを受けているときにはそのグループの子ども達に注意する。			
5	ゲームをしているときに、ルールに従う。			
6	多くのいろいろな仲間と話をする。			
7	授業中に与えられた課題を指示されたら時間内にやり終える。			
8	仲間と対立したときは、自分の考えを変えて要請する。			
9	仲間を誉める。			
10	ゲームをしているとき、順番を待つ。			
11	他の人に話しかける。			
12	ある活動から別の活動への切り替えが容易である。			
13	仲間から身体的な攻撃を受けたときは、それに応じず(相手にせず)にその場を離れる。			
14	不公平な規則に対して、適切なやり方で疑問を唱える。			
15	悪い事をしたらどうなるかが分かっている。			
16	仲間がしている活動にうまく関わる。			
17	授業中、仲間が発表していることをよく聞いている。			
18	からかわれたり、悪口を言われた時には、無視したり話題を変えたりして対処する。			
19	仲間が何かを成し遂げたときには、一緒に喜ぶ。			
20	仲間の持ち物を使う時には許可を得てからにする。			
21	色々なゲームや活動に参加する。			
22	教師が説明をしている時に、教師の方を見ている。			
23	他の子どもに好意的な言葉をかける。			
24	ユーモアのセンスがある。			
25	勉強道具や学校の備品をきちんと片付ける。			

## 資料2 児童用社会的スキル尺度

年 組 番 名 前

## \* 注意 \*

\*このちようさは、あなたが、学校でいつもいろいろなことに、どんな「感じ方」をしているかを答えてもらうものです。

\*せいせきとは、なんのかんけいもありません。ですから、あなたがいつも思っていることを、正直に答えてください。

\*友だちとそうだんしたり、まねをしったりしないで、先生の説明をよく聞いて、あなたの考えで答えてください。

あなたはふだん、学校でどのように過ごしていますか。一番あてはまる番号に、1つだけ○をつけてください。

		全然そう しない	あまりそう しない	ときどき そうする	いつも そうする
1	友だちを、ほめる。	1	2	3	4
2	友だちが失敗したり、おちこんだりしている時、はげましたり、なぐさめる。	1	2	3	4
3	自分が何かこまっている時に、先生にそうだんする。	1	2	3	4
4	友だちの気持ちを考えて話す。	1	2	3	4
5	勉強でわからないことがあったら、先生に聞く。	1	2	3	4
6	ほかの子がぶつかってきた時、おこらずに注意する。	1	2	3	4
7	先生の話を中心して聞く。	1	2	3	4
8	友だちの意見に反対する時に、なぜ反対なのか理由を言う。	1	2	3	4
9	クラスの決まりを守る。	1	2	3	4
10	ほかの子におされたり、たたかれたりした時、おこらないで理由を聞く。	1	2	3	4
11	友だちが何かやりとげた時、いっしょによろこぶ。	1	2	3	4
12	こまっている友だちを助ける。	1	2	3	4
13	友だちがいじわるをしたり、悪口を言ってきたりしても、むしする。	1	2	3	4
14	自分の気持ちを、すなおにあらわす。	1	2	3	4
15	ひきうけたら、さいごまでやる。	1	2	3	4
16	つくえの中や、ロッカーをきれいにしている。	1	2	3	4
17	自分の意見をはっきり言う。	1	2	3	4
18	先生に自分の気持ちをすなおに話す。	1	2	3	4
19	友だちになかまに入れてくれるようにたのむ。	1	2	3	4
20	クラスの係りのやくめをはたす。	1	2	3	4
21	友だちのたのみを聞く。	1	2	3	4
22	友だちを遊びにさそう。	1	2	3	4
23	友だちがいじわるをしたり、悪口を言ったりしている時にやめるように言う。	1	2	3	4
24	友だちをグループ活動にさそう。	1	2	3	4
25	じゅぎょう中、気をそらさないで最後までとりくむ。	1	2	3	4
26	友だちときょう力する。	1	2	3	4
27	友だちの表情や様子から、友だちの気持ちを考える。	1	2	3	4
28	自分が何か困っている時に、友だちにそうだんする。	1	2	3	4
29	友だちが悲しんでいる時に、はげます。	1	2	3	4

* 注意 *
*このちょうさは、あなたが、学校でいつもいろいろなことに、どんな「感じ方」をしているかを答えてもらうものです。
*せいせきとは、なんのかんけいもありません。ですから、あなたがいつも思っていることを、正直に答えてください。
*友だちとそうだんしたり、まねをしたりしないで、先生の説明をよく聞いて、あなたの考えで答えてください。

		全然 あてはまらない	あまり あてはまらない	すこし あてはまる	よく あてはまる
1	体から、力がわかない。	1	2	3	4
2	かなしい。	1	2	3	4
3	いらいらする。	1	2	3	4
4	あまりがんばれない。	1	2	3	4
5	目がつかれる。	1	2	3	4
6	なんだか、こわい感じがする。	1	2	3	4
7	勉強が手につかない。	1	2	3	4
8	ふきげんで、おこりっぽい。	1	2	3	4
9	きんちょうしている。	1	2	3	4
10	体がだるい。	1	2	3	4
11	ひとりでいたい。	1	2	3	4
12	なにもかも、いやだと思う。	1	2	3	4
13	頭がくらくらする。	1	2	3	4
14	気持ちが、むしゃくしゃする。	1	2	3	4
15	つかれやすい。	1	2	3	4
16	ずつうがする。	1	2	3	4
17	なんとなく、しんぱいである。	1	2	3	4
18	だれかに、いかりをぶつきたい。	1	2	3	4
19	気持ちが悪い。	1	2	3	4
20	さびしい。	1	2	3	4
21	なにかに集中できない。	1	2	3	4
22	いきが、くるしい。	1	2	3	4
23	気持ちがしずんでいる。	1	2	3	4
24	なにもやる気がしない。	1	2	3	4

### 3 中学校におけるSSEの授業実践 <第2学年>

#### (1) 日程と実践したスキル

11月19日(水) アセスメント実施・行動観察

「社会的スキル尺度」資料4(質問1)

「ストレス反応尺度」資料5(質問2)

11月21日(金) 2校時 SSE 「問題解決スキル①」

11月28日(金) 6校時 SSE 「問題解決スキル②」

12月12日(金) 事後測定・検証(11月19日に実施したアセスメントと同じ)

#### (2) 実践例(11月21日(金)2校時 SSE 「問題解決スキル①」)

<ねらい>

自分が問題場面に直面した時、解決方法を考えて、その中から最も有効そうなものを選ぶスキルを身につけ、実生活へ活かしていくことができるようにする。

<本時の指導>

活動内容	指導上の留意点
1 授業の目的を提示する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の問題解決スキルがどういうものか、どのような時に役に立つのかを理解させる。</li> </ul>
2 問題解決スキルについて説明する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題解決スキルは、困った時に解決方法を考え、最も有効そうなものを選ぶ練習であると知らせる。</li> </ul>
3 ワークシート①を使って、グループ学習をし、一番よい解決方法を選び、発表をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・桃太郎の物語を使い、桃から恥ずかしがって外に出てこない場面を設定し、例を紹介する。 「やさしく話しかけてみる。」 「あめをあげる。」</li> <li>・グループでいろいろな解決方法を話し合わせて、ワークシートに記入させ、その中で、最も有効なものを選び、代表の生徒に発表させる。</li> </ul>
4 問題解決のポイントを押さえる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題解決のポイントを押さえる。 ①できるだけたくさん考える。 ②似ているものを真似する。</li> </ul>
5 ワークシート②を使って、グループ学習をし、解決方法の自己評価をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達とけんかをして、仲直りをしたいけれど、どうしたらいいかわからず、気持ちも落ち着かない場面を設定する。</li> <li>・グループでいろいろな解決方法を話し合わせて、ワークシートに記入させ、それぞれの解決方法の自己評価をする。 ①自分にとってよさそう ②他の人にとってよさそう ③他に嫌なことは起こらない ④うまくできそう</li> </ul>
6 解決方法で、得点の高いもの・低いものを発表する。	<p style="text-align: right;">(○…2点、△…1点、×…0点)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自己評価が最も高かった解決方法・低かった解決方法を発表させる。</li> <li>・低かった場合、①、②、③、④のどの項目で点数が低かつ</li> </ul>

<p>7 最もよさそうな解決方法を選ぶポイントをまとめる。</p> <p>8 本時のまとめをする。</p>	<p>たのかも合わせて発表させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ &lt;①できるだけたくさん考える、②似ているものを真似する&gt;のポイントが確認できるようにする。</li> <li>・ 困った時に解決方法を考え、最も有効なものを選ぶポイントを確認し、自分だけでなく、相手にとっても、周りにとっても、いい解決方法が見つけられるように意欲づけをする。</li> </ul>
---	---

<ワークシート>

11月21日(金)	2年 組 番 氏名	
<b>中学生のための問題解決トレーニング①</b>		
(ワーク①)		
<p>あなたが川を眺めていると、なんと、大きな桃が流れてきました。          桃の中には、かわいい桃太郎がいます。          しかし、桃太郎は、恥ずかしがって桃からなかなかできません…。          このままでは、物語が進みません。さて、どうしたらよいでしょうか。</p>		
↓		
①どんな解決方法がある？		
<div style="border: 1px solid black; height: 30px; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; height: 30px; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; height: 30px;"></div>	<div style="border: 1px solid black; height: 30px; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; height: 30px; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; height: 30px;"></div>	<div style="border: 1px solid black; height: 30px; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; height: 30px; margin-bottom: 5px;"></div> <div style="border: 1px solid black; height: 30px;"></div>
↓		
②どれがよさそうかな？		
<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 80px;"></div>		



(ワーク②)

あなたは、昨日友だちとけんかをしてしまいました。  
あなたは、その友だちと仲直りしたいのですが、どうしたらいいのかわかりません。  
気持ちもイライラしたり、落ち込んできました。

<ポイント>

- ①できるだけたくさん考えよう!
- ②似ているものはマネしよう!



①どんな解決方法がある?

A	B	C
D	E	F
G	H	I



<やりかた>

○・△・×をつけてみよう!

最後に、○2点・△1点・×0点で合計を計算してみよう!

②どれがよさそうかな?

<解決方法>	自分にとって よさそう?	他の人にとって よさそう?	他にいやなこと は起こらない?	うまく できそう?	合 計
A					
B					
C					
D					
E					
F					
G					
H					
I					

### (3) 実践効果の検討

授業実践後、SSEの効果をみるために、授業前に行ったものと同じ尺度の測定を行った。授業前に攻撃性の高かった生徒2名(AさんBさん)をターゲット生徒とし、学級全体と2名の生徒の効果を数値化して検証した。結果は以下のとおりである。

Aさん、Bさんともに攻撃性のポイントが下がっている。さらに、両者とも抑うつや無気力のポイントも下がっている。また、Aさんは、学習への取り組みへの姿勢も良好になった。

早稲田大学大学院行動心理学研究室による分析結果から、統計的には有意な結果とはならなかったが、社会的スキル得点があがり、ストレス反応得点下がったことが立証され、授業の効果があつたと考えられる。

#### <社会的スキル尺度>

下位因子の項目	Aさん		Bさん		学級の平均	
	前	後	前	後	前	後
①向社会的行動 (1. 2. 3. 6. 7. 10. 13. 16. 18. 21)	35	32	28	35	1.28	0.90
②引っ込み思案行動 (4. 8. 11. 14. 17. 19. 22. 24)	12	11	17	11	31.62	31.0
③攻撃行動 (5. 9. 12. 15. 20. 23. 25)	12	7	13	7	11.21	10.21

#### <ストレス反応尺度>

下位因子の項目	Aさん		Bさん		学級の平均	
	前	後	前	後	前	後
①身体的反応 (4. 6. 8. 11. 16)	15	0	3	0	1.28	0.93
②抑うつ・不安感情 (1. 3. 5. 17. 18)	15	0	5	0	1.55	0.86
③不機嫌・怒り感情 (9. 12. 13. 14. 15)	15	0	0	0	1.28	0.90
④無気力 (2. 7. 10. 19. 20)	15	0	1	0	1.31	0.97

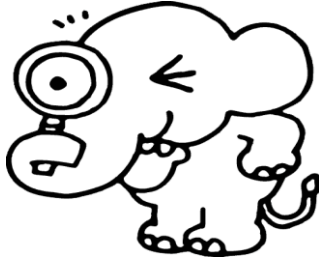
\*下位因子の項目(番号)は、資料4と5の尺度の項目である。

<早稲田大学大学院行動臨床心理学研究室による 学級全体の結果と分析>

資料4 社会的スキル尺度

**質問1**

あなたのいつもの様子について教えてください。それぞれの質問について、最もよくあてはまると思う数字をどれか1つだけ選んで○でかこんでください。



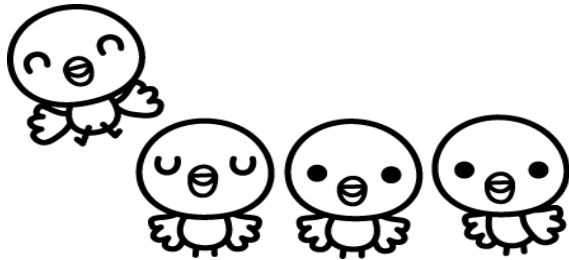
1 ぜんぜん 当てはま らない	2 あまり あてはま ら	3 少し あてはま る	4 よく あてはま る
--------------------------	-----------------------	----------------------	----------------------

1	困っている友だちを助けてあげる。	【 1 2 3 4 】
2	友だちの話をおもしろそうに聞く。	【 1 2 3 4 】
3	自分に親切にしてくれる友だちには親切にしてあげる。	【 1 2 3 4 】
4	友だちに話かけられない。	【 1 2 3 4 】
5	友だちをおどかしたり、友だちにいばったりする。	【 1 2 3 4 】
6	友だちが失敗したらはげましてあげる。	【 1 2 3 4 】
7	友だちのたのみをきく。	【 1 2 3 4 】
8	自分から友だちの仲間に入れない。	【 1 2 3 4 】
9	何でも友だちのせいにする。	【 1 2 3 4 】
10	友だちのけんかをうまくやめさせる。	【 1 2 3 4 】
11	友だちの遊びをじっと見ている。	【 1 2 3 4 】
12	でしゃばりである。	【 1 2 3 4 】
13	友だちがよくしてくれた時は、お礼を言う。	【 1 2 3 4 】
14	休み時間に友だちとおしゃべりしない。	【 1 2 3 4 】
15	まちがいをしても、すなおにあやまらない。	【 1 2 3 4 】
16	引き受けたことは、最後までやり通す。	【 1 2 3 4 】
17	遊んでいる友だちのなかに入れない。	【 1 2 3 4 】
18	友だちの意見に反対する時は、きちんとその理由を言う。	【 1 2 3 4 】
19	なやみごとを友だちに相談できない。	【 1 2 3 4 】
20	友だちに、らんぼうな話し方をする。	【 1 2 3 4 】
21	相手の気持ちを考えて話す。	【 1 2 3 4 】
22	友だちとはなれて、一人で遊ぶ。	【 1 2 3 4 】
23	友だちのじゃまをする。	【 1 2 3 4 】
24	友だちに気軽に話しかける。	【 1 2 3 4 】
25	自分のしてほしいことを、むりやり友だちにさせる。	【 1 2 3 4 】

資料5 ストレス反応尺度

**質問2**

あなたはこの1週間、どんな気持ちでしたか。それぞれの質問について、最もよくあてはまると思う数字をどれか1つだけ選んで○でかこんでください。



0 ぜんぜんちがう	1 少しそうだ	2 まあまあそうだ	3 そのとおりだ
--------------	------------	--------------	-------------

1	悲しい。	【 0 1 2 3 】
2	頭の回転がにぶく、考えがまとまらない。	【 0 1 2 3 】
3	心が暗い。	【 0 1 2 3 】
4	頭痛がする。	【 0 1 2 3 】
5	泣きたい気分だ。	【 0 1 2 3 】
6	頭が重い。	【 0 1 2 3 】
7	根気がない。	【 0 1 2 3 】
8	体がだるい。	【 0 1 2 3 】
9	腹立たしい気分だ。	【 0 1 2 3 】
10	むずかしいことを考えることができない。	【 0 1 2 3 】
11	頭がくらくらする。	【 0 1 2 3 】
12	だれかにいかりをぶつきたい。	【 0 1 2 3 】
13	いらいらする。	【 0 1 2 3 】
14	いかりを感じる。	【 0 1 2 3 】
15	ふゆかいな気分だ。	【 0 1 2 3 】
16	体が熱っぽい。	【 0 1 2 3 】
17	不安を感じる。	【 0 1 2 3 】
18	さみしい気持ちだ。	【 0 1 2 3 】
19	ひとつのことに集中することができない。	【 0 1 2 3 】
20	勉強が手につかない。	【 0 1 2 3 】

## V 研究のまとめと今後の課題

### 1 児童支援記録票（個票）の作成について

中学校1年生における学校不適応（中1ギャップ）の解消を目指して、小中連携が重要視されている昨今だが、なかなかスムーズに連携できずにいるのが現状である。小学校から中学校複数校へ、複数の小学校から中学校1校へと入学することも要因の一つと考えられる。

個票作成及び提案の成果として次の二点が挙げられる。

まず、個票作成に当たり、校内はもちろんのこと、小中学校間でも話し合いを繰り返す必要があることとなった。そのため、必然的に教育相談部会や職員会議等で意見を交換したり、小中学校間で情報交換の場を持ったりすることで、個票の必要性に対する意識を高めることができた。

次に、個票による情報の共有は、全職員が同一歩調で児童生徒に対応するための基盤となり、校内支援体制を充実することにつながる。特に、本研究で提案した個票は、「児童生徒の欠席状況」「効果のあった支援・なかった支援」「他の専門機関との連携状況」などの情報を得ることができるだけでなく、小中連携という視点からも重要な意味を持つ。担任が代わっても、情報を積み重ねながら共有することで支援の継続を図ることができ、小中連絡会議で有効的に活用することで中学校入学後の支援に役立つ。受け取った中学校側では、個票を基に担任・保護者・他機関等と連携し、学年会や教育相談部会等で具体的な支援策を考える。その支援策を年度当初の職員研修や職員会議等で、職員の共通理解、共通行動を図り、実践していく。

個票の形式は本研究で一例を提案したが、言うまでもなく、各小中学校の実情に合わせて、形式を工夫、改善する必要がある。個票作成の対象となる児童生徒についても十分に検討すべきである。そのためには、小中連携の場を定期的に設けたり、生徒指導・教育相談部会を中心とした校内支援体制を充実させることが重要である。

また、児童生徒のプライバシーに関わることであるので、管理責任者をどうするのか、また保管方法をどうするのか等のセキュリティーについても万全を期さなければならない。

### 2 S S Eの授業研究について

本研究では早稲田大学人間科学芸術院嶋田洋徳教授のご指導や早稲田大学院行動臨床心理学研究室の方々の協力により、授業が実践でき、効果を数値化して検証することができた。また、授業は研究室の方が中心になり実践したので、実践方法も学ぶことができた。

S S Eの授業の成果としては、実施後、小学校においても、中学校においても、社会的スキル得点上がり、ストレス反応得点が下がったことが立証された。また、小学校においては、S S Eを実践していないクラスでは両得点にほとんど変化が表れないという結果も出た。実際の学級集団の中で、担任が話題にしやすく



なり、獲得したスキルを活用し、人間関係を円滑にしようとする場面が見られた。SSEの授業を積み重ねること、すなわち社会的スキルを意図的に学習する機会を設けることにより、人間関係によるストレス反応が軽減された。

このことから、学校不適應の未然防止の一つとしてSSEは有効であるということが言える。

課題として次の二点が挙げられる。

小林、相川（1999）によるとSSEを行う場合の留意点の1つとして「教師と生徒の関係が良好であること」とある。やはり、学級担任が学級全体の状態や子どもの実態を詳細に、かつ客観的に把握し、SSEを実践するほうがより効果があると予想される。

更に、本研究のようにSSEを数時間だけ実践したり、SSEを一担任が個人で自分の学級だけで取り組んだりするのでは持続的な効果は望めず、本研究の主題である「未然防止」にはなかなか結びつかない。より多くの児童生徒の「ストレス反応」を軽減し、学校不適應を変容、予防するためには、意図的、計画的に、学年単位や学校単位でSSEを実践できるようにしていく必要がある。そのためには、より多くの教師がSSEについての意義や方法を正しく理解し、「校内支援体制」の一つとして校内研修に位置づけることも検討すべきである。



#### <参考・引用文献>

- 文部科学省「平成19年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2008
- 文部科学省「不登校の対応に当たって」2003
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター「中1不登校生徒調査（中間報告）〔平成14年12月実施分〕—不登校の未然防止に取り組むために—」2003
- 埼玉県総合教育センター「ソーシャル・スキル・トレーニング（SST）に関する指導プログラムの開発」2005
- 新潟県教育委員会「中1ギャップ解消調査研究事業報告書（平成15・16年度実施）」2005
- 岩手県立総合教育センター『中学校1年生における早期対応を図る小・中学校の連携の在り方に関する研究—「基礎的情報」の共有とその生かし方をおして—』2008
- 佐藤正二・相川充編「実践ソーシャルスキル教育」図書文化2005
- 嶋田洋徳「小学生の心理的ストレスと学校不適應に関する研究」風間書房1998
- 嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二「児童の社会的スキル獲得による心理的ストレス軽減効果」行動療法研究22（2）9-20頁1996
- 嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・坂野雄二「小学生用ストレス反応尺度の開発」健康心理学研究7巻2号46-58頁1994
- 小林正幸・相川充編著「ソーシャル・スキル教育で子どもが変わる」図書文化1999
- 小林正幸・小野雅彦著「教師のための不登校サポートマニュアル」明治図書2005